

助産モデルの開発をめざして

三井政子

一昨年の総会において助産婦業務と教育についての検討を行なうことが要望された。それを受けて、昨年来委員会設置について討議が重ねられ、今年度（平成2年度）から本学会の事業として「助産婦業務・教育委員会」が新設され、この問題に取り組むことになった。

助産学は実践の学問であって、助産婦教育と助産婦活動の基盤をなすものである。教育と実践は相互に関連を持ち、両者は車の両輪の如く、一方に偏することなく推進していかねばならない。言い替えると、教育は実践する人材を育成するのであるが、教育の場には実践からのフィードバックが必須の情報になる。教育の場ではそれらを分析し、理論化して教育の質的向上を図り、新しい人材を育成する。この繰り返しによって、究極的に助産業務のレベルが高まっていく。教育・研究と実践との連携をいかにスムーズに行なって両者のレベルアップを図るかは、重要な問題であり、本委員会が設置された理由でもある。

助産学の基本は、人間が生来もっている生殖能を円滑に機能させるように援助することである。この目的を達成するには、援助を必要とする人々への自他のケアを学問的、実践的に追求・開発・発展させる不断の努力が望まれる。

助産婦は助産学を学び、自立したケア提供者として社会的承認を受けてきた。しかし、助産婦業務については、看護婦・保健婦などの看護職種の間で、あるいは産科医師との間で業務分担についてのコンセンサスが得られ

ていない現状である。助産婦の間でさえ、業務の枠や責任問題について一致した意見が得られているとは言い切れないのではなかろうか。この現状では、受益者が助産婦とのインフォームド・コンセントに迷いを持つことも当然であろう。この問題に関しては、業務範囲の拡大を含めての検討が必要になろう。

助産婦を取り巻く現代社会では、末だかつて経験したことのない少産傾向と人口の高齢化が定着してきている。少なくとも、出生数の異常とも言える減少には、なんらかの形で歯止めをかけなければ、社会自体の構成が歪んで行くことは目に見えている。若い世代が子育ての楽しさをエンジョイできるような環境作りが望まれる。現状では、少産に伴う社会的要請に対応した助産業務の質や内容の改善が求められている。それに加えて、ME機器、コンピュータをはじめとする科学技術の進歩を受けて、我々の教育と業務をどのように進展・拡大させるのかも問われている。助産業務の技術水準の向上並びに実践を踏まえた助産モデルの確立をアカデミックに検討する必要に迫られているのである。さらに、これらの検討を通して、本学会の理念や用語の定義などについての取り組みが不可欠となろう。

以上、概観しただけでも、本委員会の用務は繁雑多岐にわたることが予想される。

新しい委員会の活動を何から着手すべきか、会員諸姉と共に進むべき方向を模索し、一步一步着実に歩んでいきたいと考えている。

（理事、助産婦業務・教育担当）

第5回日本助産学会学術集会へのお誘い

村山郁子

平成3年3月17日(日)は、新潟市・新潟県民会館において「第5回日本助産学会学術集会」を開催いたします。既に会員の皆様のお手元に、開催通知と演題募集の御案内が届いたことと思います。

年一回の学術集会です。当日は津々浦々から、できるだけ多くの方々のご参加をお待ちいたしております。どうぞ日頃のご研究の成果のご発表や、密度の高い討論が行われますよう、学術集会の成功を祈念いたしつつ私をはじめ、企画委員一同も準備に熱が入っている今日この頃です。

今回のメインテーマは、「助産学の未来—その手がかりとなるもの—」と決めました。このテーマに決めた理由は2つあります。1つは、助産婦学校養成所のカリキュラムが今年度(平成2年度生)から改正されたことに着目しました。今回、主要な科目として名命された「助産診断学」と「助産技術学」のねらいや、内容を構成する諸要素について、思考し、研鑽し、守り育てていく必要を感じたためです。このことは、教育の現場、実践の現場、開業・施設内勤務などを問わず、すべての助産婦が、今を生き、歴史をにんでいる者のひとりとして、果していく責務であると思います。

いま1つは、第4回の学術集会のシンポジウムの討論で、助産婦の本質を発揮できる場は開業か//施設内か//等々と議論が沸騰しました。その中で、「開業助産婦の方々数名から、地域に根ざした活動内容と信望を得て働く喜びが発言されますと、すかさず現に施設内分娩が多くを占め、年々勤務助産婦が増加する中で、主体的な活動を確立していくことの重要性を力説する勤務助産婦の発言も次々と続き、」会員参加の討論が従来になく盛り上りました。私はあのシンポジウム「社会のニーズと助産婦」の会場にあって、その熱気・エネルギーを第5回に引き継ぐことを考えていたことによります。

どうぞ会員の皆様、メインテーマの意のあ

るところをおくみ取りの上、現状の助産婦教育や活動の中から未来の助産学を見出す手がかりを、小さなことでも確かなものを求めて、日頃研鑽され積み上げてこられたものをもって応募して下さいますよう期待しております。

さて、我が国の母子保健は、人間的な幸福と文化的な生活、資質の向上を求め「多産多死時代」から「少産少死時代」をひたすら走り続けてきました。しかし今日、今なぜ出生率が低下するのか?出生率低下の最大の原因は?出生率の減少は社会的にどのような影響をもたらすか?等々と、出生数の減少が、にわかにはクローズアップされてきました。助産婦である私達は、出生数の増加や減少を最も身近かに感知し、職業を通して個々の家庭の家族計画の目標や具体策を専門家としての立場から計画し、相談を展開しています。

生まれてくる子を含めて、その家族が明るく健康で幸福な、人間らしい生活ができ、子どもはすべて、待ち望まれて生まれてくるように祈り続けて業務に携わってきています。

晩婚傾向、産みたがらない女性についての話題や活字を見聞きする機会が多くなってきていますが、結婚する・しない、産む・産まない等の選択や決定は個人の権利の範疇に属する事柄です。超高齢化社会の到来を目前にして、出生率の減少と社会福祉政策や労働力などの問題が直接的にも間接的にも母子保健の分野と関連して、助産婦の仕事に影響を及ぼしてきていますが、このような時代こそ、母子やその家族の幸福と健康の保持増進を考えて活動する助産婦の出番であると強く感じています。

皆様のご健康とご活躍を祈念いたしますとともに、当日学術集会会場において、お会いできることを楽しみに筆をおきます。

第5回日本助産学会学術集会会長
新潟大学医療技術短期大学部
専攻科 助産学特別専攻教授

第4回日本助産学会総会報告

第4回日本助産学会総会並びに学術集会は、1990年3月11日(日)日本都市センターホールにおいて700余名の参加者により盛会に開催されました。

総会は、12時50分より当日参加会員中の237名の出席のもと、近藤理事長あいさつにより開会されました。

総会において報告または提案され審議された事項を報告します。

1. 平成元年度会員数について

(2月末の状況)

個人 740名 普通会員 724名
特別会員 16名

(地区別)

北海道	27名	東北	21名
関東甲信越	94名	東京	117名
東海北陸	126名	近畿	240名
中国四国	60名	九州沖縄	55名

機関会員 2機関

入会承認数 126名(普通)

2. 平成元年度収支決算

収入 6,254,653円

(繰越金・会費・その他)

支出 2,433,720円

(会議・学会誌刊行・ICM会費・
通信費・その他)

繰越 3,820,933円

3. 理事会は5回開催し、学会事業推進・第4回学術集会開催・ICM関係事業及び次期役員選出等について審議した。また入会申込者の審査を行なった。

4. 活動報告

1) 渉外委員会

会員増加対策として、助産婦教育機関へ「入会案内」を送付し、卒業者を入会勧誘依頼

ニュースレター第2号を第4回学術集会参加非会員希望者に配布した。

2) 会則委員会

「学術集会特別会計規程案」を作成した。現在「入会資格基準について」検討中。

3) 編集委員会

学会誌 第3巻第1号の編集を刊行

4) 学術振興委員会

第2回ワークショップを10月8日(日)開催した。

テーマ「助産学研究の課題を探る」
プログラム 基調講演と3事例による
グループワーク

5. 平成2年度事業計画

第5回学術集会の開催

学会誌・ニュースレター発行

助産学に関する研究会開催

国際担当、業務・教育検討委員会設置

以上の他、第4回助産学会学術集会の当日までの準備状況が報告され、事業計画に引き続いて平成2年度収支予算案が審議され決議された。

6. 役員及び評議員の改選

1) 評議員 会則第12条の規定により選出された名簿案の通り総会において承認。(名簿参照)

2) 役員を選出は、会則第10条の規定により行なうため、総会を15分間休憩して、新評議員により臨時評議員会を開催し、理事・監事を選出した。

引き続き、新理事による理事会において、理事長・副理事長を選出し、臨時評議員会へ報告し承認を得た。

選出された理事・監事及び理事長・副理事長は休憩を終り再開された総会で報告し承認された。(名簿参照)

引き続き、第5回学術集会会長村山郁子新潟大学医療技術短期大学部教授から、新潟市における来年度学術集会の紹介と参加案内等のごあいさつがあり、次に第6回学術集会会長に決定した松本八重子東京都立医療技術短期大学教授が紹介された。

第4回評議員会開催報告

1990年3月10日(土)18時30分~20時00分、聖路加看護大学第三大教室に於て、出席25名・委任状8名により開催されて、総会提出事項の審議、第6回学術集会会長の選出が行なわれ、総会において承認を受ける次期評議員案(名簿)紹介された。

(理事、庶務担当 小木曾みよ子)

第5回日本助産学会学術集会演題募集

メインテーマ

助産学の未来 —その手がかりとなるもの—

開催期日 1991年3月17日(日)

会場 新潟県民会館ホール
新潟市一番堀通三番地の一

プログラム 一般講演、会長講演、
シンポジウム、ワークショップ

一般講演発表形式

口演：口述発表

ポスターセッション：掲示板を用いて発表

テレビセッション：VHSのビデオで15分
以内で発表

○演題申込方法

第5回日本助産学会学術集会申し込み書
(学術集会事務局より送付)に、所定の事項
を記入して、1990年9月29日(土)消印
有効までに送付する。

第4回学術集会開催報告

日時 1990年3月11日(日)
9時00分～17時00分

会場 日本都市センターホール

参加数 704人

プログラム

一般講演 口演 14題、示説 5題

会長講演 日本人の子産み・子育て
—伝承と変容—

シンポジウム 社会のニーズと助産婦

懇親会 同日 17時15分～19時00分

学術集会は、参加者の活発な討論で盛りあ
がり、懇親会は、なごやかに楽しく終始した。

第2号ミスプリント訂正連絡

第2号4頁右上、「国際助産婦の日」の記
事4～5行目は「祝典は、1991年5月5日が」
です。

お詫びして訂正します。

○原稿提出と採否について

申し込み書を提出すると、専用の原稿用
紙とその記入要領が一括に送付されます。

原稿提出の期限は1990年11月10日(土)
必着です。なお、採否については演題選定
委員が決定し、採否が通知されます。

○申し込み先

〒951 新潟市旭町通2番町746
新潟大学医療技術短期大学部 専攻科
第5回日本助産学会学術集会事務局
電話 025-223-6161(内線6200～6202)

※演題申し込み資格について

演題の申し込みは、演者・共同研究者と
もすべて日本助産学会会員に限られており
ます。

まだ入会していない方は、早急に入会申
し込みをして下さい。必要書類は表記・日
本助産学会事務局へご請求下さい。

ワークショップのお知らせ

日本助産学会では、助産学研究の推進を図
り、ワークショップを開催します。今年は会
員の皆様からの関西でも開催してほしい、と
いう希望も受けて、神戸にて、11月4日(日)、
募集人員40名にて開催する予定です。

会場・プログラム・申し込み方法につい
ては後日担当委員会より連絡されます。

なお、ワークショップへの参加は、日本助
産学会会員に限られます。同僚・友人などで
受講希望のある方がありましたら、早急に入
会申し込みをされるようおすすめ下さい。

(入会申し込み書類は表記・事務局へご請求
下さい。)

事務局だより

・猛暑が続く此の頃お元気でいらっしゃいま
すか。ニュースレターNo.3をお届けします。

・会費納入についてお願い

平成元年度会費未納の方及び本年度会費
未納の方大至急納入をお願いします。

日本助産学会評議員名簿(1990.4~1993.3)

北海道

伊藤 千栄子 北海道立衛生学院

宮崎 みち子 上に同じ

東北

加藤 百合子 秋田県立衛生学院

久慈 安子 岩手県立中央病院

西野 加代子 弘前大学医療技術短期大学部

関東 甲信越

青木 康子 東京都立医療技術短期大学

板倉 千栄子 千葉大学医学部附属助産婦学校

山崎 サク 東京都立築地産院

佐々木 敦子 信州大学医療技術短期大学部

中島 知哉子 群馬大学医療技術短期大学部

村山 郁子 新潟大学医療技術短期大学部

東京

伊藤 隆子 母子保健研修センター助産婦学校

笠原 トキ子 (社)全国母子健康センター連合会

近藤 潤子 聖路加看護大学

平沢 美恵子 日本赤十字看護大学

松本 八重子 東京都立医療技術短期大学

宮里 和子 国立公衆衛生院

内藤 洋子 国立東京第2病院附属看護学校

東海 北陸

内山 和美 聖隷学園浜松衛生短期大学

小木曾 みよ子 名古屋大学医療技術短期大学部

坂井 明美 金沢大学医療技術短期大学部

山路 早苗 宝助産院

近畿

石塚 和子 石塚助産院

岡田 幸子 和歌山県立高等看護学院

岡本 喜代子 大阪府立助産婦学院

川原 淳子 大阪市立助産婦学院

多賀 琳子 日本助産協会大阪府支部

三井 政子 京都大学医療技術短期大学部

中国 四国

岸 英子 山口大学医療技術短期大学部

竹内 美恵子 徳島大学医学部附属助産婦学校

吐山 ムツコ 新見女子短期大学

九州 沖縄

浅生 慶子 国立小倉病院附属看護助産学校

賀久 はつ むなかた助産院

島尻 貞子 沖縄県看護協会

若松 かえい 鹿児島大学医療技術短期大学部

日本助産学会役員・委員及び学術集會会長名簿

役員		1990.4~1993.3 (担当役割名)
役職名	氏名	
理事長	近藤 潤子	(総括)
副理事長	松本 八重子	(国際)
理事	青木 康子	(編集)
〃	伊藤 隆子	(渉外)
〃	小木曾 みよ子	(庶務)
〃	佐々木 敦子	(会則)
〃	竹内 美恵子	(学術振興)
〃	平沢 美恵子	(ニュースレター)
〃	三井 政子	(助産婦業務・教育)
〃	宮里 和子	(会計)
監事	浅生 慶子	
〃	山路 早苗	

委員		1990.6~1990.3
国際委員会		
鈴木悦子	聖路加看護大学	
瀬井房子	助産院ベビーヘルシー美薔	
編集委員会		
加藤尚美	東京都医療技術短期大学	
堀内成子	聖路加看護大学	
水谷喜代子	東京大学医学部附属助産婦学校	
学術振興委員会		
新道幸恵	神戸大学医学部附属病院	
末原紀美代	大阪府立看護短期大学	
竹岡真理	徳島大学医学部附属助産婦学校	
宮中文子	京都府立医科大学附属看護専門学校	
助産婦業務・教育委員会		
山村智恵子	九州大学医療技術短期大学部	
岡部佐千子	岡部助産院	
岡本喜代子	大阪府立助産婦学院	
左古かず子	あゆみ助産院	
多賀琳子	多賀助産院	

学術集會会長		
第5回	村山 郁子	(1990.4~1991.3)
第6回	松本 八重子	(1991.4~1992.3)